※ 田沢のタツ子

昔、昔、院内というどこに、辰子という娘コいたけずものな、かかさんにそだてられでだんだん大きくなってな、大きくなりしだえにきれいな娘さんになったずおん。

世間のひとから、なんとあえだばきれいな娘コだ、どこかのおじょうさんのようだなんてほめられるずおな、それで辰子もなんぼきれいだと思って、前の川さえってなあ、水鏡でみだずおん。したばやっぱりきれいだけずおな。色は白いし、髪は黒いしなんときれいだなと思ったずおん。

んだどもな、今こうきれいだども、だんだん年いけば、つらこさ、しわめくべし、髪また白髪になるべし、歯も欠けて腰まがてばんばになってしまうべな、いやだな、年ゆきだぐねなそう思ったずおん。

して、その晩な、こっそり起きてな、どこなえでもみんな寝てしまってから、外さでだずおん。して、ズンズンと山さ登っていったずおな、山さのぼってだば、そこにな観音様のお堂あったけずおん。

それで、その観音様さ願かけだずおん、「観音様、観音様、なんとかこの辰子どこ、いつまでもいまのままでおいでたもれ、年ゆかねようにしてたもれ」と、いって願かけたずおん。毎晩、毎晩な雨ふっても、雪ふっても、風ふえても、毎晩山さえって願かけたずおん。百日も続いたずおな。

そうしてるうちに春来たずおん。雪コ消えてな、草コもおえてきたずおん。サクラの花も咲いたずおん。モモも咲いたずおん。フジも咲いたずおん。そしたばな、山さワラビコおえてきたずおん。

それでな、ある天気のええ日にな、近所の友だちといっしょにワラビコとりに行ったずおん山さえったばな、山えっぺえにワラビコだずおんな。みんな、こっちの山さ行く人あり、あっちの山さ登っていく人もあり、辰子も一生懸命ワラビ、ポツポツポツポツととっていったずおん。そしたばな、清水(シズ)あってな水モリモリモリモリモリと湧いていたずおん。おや大きなシズだな、そのシズからな川になってな、ザアザアと水流れていたけずおん。その川にな、ざっこえだずおんな、ゾヨゾヨゾヨゾヨとな、ざっこおよえでいだずおん。辰子それ手でつかむどおもえば、なんぼもつかむにえけずおんな。一匹つかんだ、まだ二匹つかんだ、三匹、四匹とつかんでな、くしささしてな

つくしこしゃでな。こんど枯柴とってな、火たいだずおん。火ぼんぼんとたいてな、ざっこあぶだずおん。

さあ、ざっこあぶれてきたど、プーンとなうめえにおいしてきたぞ。あんまり(うまい)んめそうでな、一匹くったずおん、ムシャムシャムシャと、あーうんめえ、こでられねえどな、またくたずおん。二匹目もくった、三匹目もくったずおん。四匹、五匹とな、みなくってしまったずおん。

さあそうしたば、のどかわいてきたずおんな、あんまりのどかわくので、シズさ行て水飲んだずおん。手ですくってなスーと飲んだずおん。ああうめえてな。また二杯目もスーと飲んだずおん。三杯、四杯、五杯とのんだ。なんぼ飲んでも、のどかわくずおな。それでこんどはなあ、そのシズさ口つけでな、ガブッと口つけてなゴクンゴクンゴクンゴクンと川の水消えるだけ飲んだずおな。

そしたば、辰子のからだの肌さな、へびのこけらなバラーッとつだずおん。そしてな長まっていったずおん。ズンズンズンズンと辰子のからだなズンズンズンとのびてな、三十三ひろにもなってな、からだまた太くなってな、それさこんど頭さな角おえだずおな、鹿の角みたえな長い角おえてきてな、まなぐたままたギロッとトチのようなまなぐたまになったずおな。それさ口ざっくりと割れてな、上、下からきばニユッとでてきたずおな。辰子はあ、竜になってしまったずおん。

そしたば、いままで、いい天気だったのがあちこちから、まっ黒な雲がでてきて、大粒の雨な、ボツン、ボツン、ボツンと降ってきたずおん。こんど雷だあ、ゴロゴロゴロゴロゴロ、ピカーツと稲妻だずおな。ゴロゴロゴロゴロゴロ、雨、ザーツと降って来たずおん。降った、降った、降った降った、滝のような雨ザーツと降ってな、こんど川という川おお水だずおん。ノロ、ノロ、ノロ、ノロ、ノロ、ノロ、ノロ、ノロ、ノロとな、あっちの山は崩れ、こっちの山もくずれてな、そしてそこさ大きな潟できだずおな。そしてなあ、辰子、その潟の主になってな潟の底さ沈んでくらすことになったずおん。

さあ辰子の家のかかさんな、待ってだずおん、おやおや、おや、雨降ってきた、おやおや、おや雷鳴ってきた。辰子早くもどってこえばええなと思ってたずおん。ばんげになっても、もどてこねずおな。「おや、ばんげになってももどってこね、なんとしたべな」

夜中になってももどってこねずおなん。かかさん心配してな、木の尻もってな、振りながら、辰子どこ、さがしにえったずおん。

「タツ子ヨー、タツ子ー」

てな、山さえってもな、沢さえっても辰子えねずおん。だんだん夜あけてくるのに、辰子えねずおん。そしたば潟のそばさ来たずおん。

おや、ここに潟なんかいままでなかったども、ああ、ゆべなの大雨で潟できたんだな。ああ、辰子ここさ落ちて死んだかもしれねえな。どこかに生きていねべかなと、さかんだずおん。

「タツ子ー、タツ子ヨー」と、叫んだずおん。

その声な、竜になった辰子な、潟の底で聞いたずおん。あっいまのあの声、かかさんの声だな、かかさんさ知らせねばねえなと思ってな。辰子の竜じっと浮いて来たずおん。三十三ひろもの竜なニユッと頭もたげでな、かかさんどこをニユーッとみてな、「かかさん、かかさん、ゴメしてたんひ、おら、観音様さあまり大きい願かけだば、こんなになってしまったずおんのゴメしてたんひ」と、いってまた底さズウと沈んでいったずおん。かかさんな、おやおや悲しいことになったな、こまったな、そして持ってきた木の臼をダボンとななげだば、マスになってズーと泳えでいったけずおん。

かかさんなきながら家さもどったずおん。したばな、その次の日からな、ざっこな、かかさんの(水屋)みんじゃさな流れてきたずおん。ダボン、ダボンとなん匹もきたずおん。それなかかさんうってな一生楽にくらしていったけずおん。トッピンパラリノプー。